

## 4 出土遺物

### (1) 瓦磚類

出土遺物の大半は瓦で、軒丸瓦214点、軒平瓦362点、丸瓦約15000点、平瓦約17000点、鬼瓦3点、隅木蓋瓦1点、緑釉水波文磚24点などであり、興福寺創建期から江戸時代におよぶ(第18・19図)。

**軒丸瓦** 1は興福寺式6301A、2は6301D。6301は合計34点出土し、うち7点が6301A、5点が6301D。調査区西端の瓦溜SK7560からは6301が12点出土し、6301Aが2点、6301Dが1点。3は6271AでSK7560から1点出土。久米寺と同範。1・3の瓦当裏面には布目を残す。6301Aの大部分には布目を残すが、2はへう削りが全面におよぶ。以上は興福寺創建期の瓦。そのほか奈良時代の瓦に、4(6235A、東大寺同範)、5(6201A、元興寺同範)などがある。6は瓦当裏面に布しぼり目(6')を残す一本作りの瓦。平安宮内裏に類例があり、出雲産か(『平安京提要』角川書店1994)。7は扁平な表現の複弁8弁蓮華文。共に平安中期。8・9は永承の火災以降、治承の兵火以前の瓦。10は擬複弁蓮華文。11は中房周囲に薬をもつ蓮華文で、共に平安末期の瓦。12・13の三巴文軒丸瓦は14世紀代。13は北面回廊南の瓦溜SK7580出土。14は単弁12弁蓮華文で、北円堂では慶安年間修理時の瓦とする(『興福寺大湯屋・北円堂修理工事報告書』1966)。15はSK7560から出土した鬼面文軒丸瓦(口絵)。鼻を高く表現する。他に類例が乏しく時期不明だが、平安時代か。16は「興福寺」の文字を表す中世の文字文瓦。外区・周縁が剝離している。瓦当面中央に菊花状の刻印を押す。17は桐文軒丸瓦で、五七の桐を飾る桃山期のもの。文様は2種ある。回廊内側に散在して6点出土し、3点は金箔を残す。口絵にあげた金箔瓦の瓦当直径は約15cm、厚さ約2.6cm。金箔瓦は全国51遺跡から出土しており(第2表)、大和国からは初例である。

**軒平瓦** 18・19は興福寺式6671Aで創建期の瓦。20・21は6671E。6671は38点出土。うち6671Aと認定できるもの28点、6671Eが5点。今回出土した6671Aには顕著な範傷は認められない。22は6739Aで西隆寺と同範(『西隆寺発掘調査報告』1993)。23は6692Aで、大安寺、法隆寺(『法隆寺の至宝』15小学館1992)に同範品あり。24は重郭文6572。以上は奈良時代。25は対葉花文軒平瓦。曲線顎で全長が約42cmと長く、顎に朱がつく。26は均整唐草文軒平瓦。範傷が著しい。これらは平安前期。27は永承再建期の軒平瓦。28は崩れた宝相華唐草文で、奈良市北小路遺跡出土品(『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報V』1995)は同範であろう。29は退化した唐草文軒平瓦。30は宝相華唐草文軒平瓦。31は巴文と珠文をかざり、上外区に珠文、下外区を鋸歯文とする。薬師寺304(『薬師寺発掘調査報告』1987)とは部位が異なるが同範であろう。以上は平安後期。32・33は均整唐草文軒平瓦で、養和再建期。34は均整唐草文軒平瓦で、SK7580から4点出土。35・36・41・42は菊水文軒平瓦。37は四菱を中心飾りにもつ。38は連珠文軒平瓦。39・40は、「興福寺」の寺名を表す文字文軒平瓦。以上は中世。

**鬼瓦** 43は鬼面文鬼瓦の向かって左側部分。鬼面の周縁に連珠文と輻状文をめぐらす。厚さは約4cm。平安宮内裏から出土した鬼瓦は、周縁を複線鋸歯文・連珠文と面違輻状文で3重にかざっており(山本忠尚『鬼瓦』至文堂1998)、今回出土した鬼瓦はその簡略形とみられる。平安時代のものであろう。

**緑釉水波文磚** 半肉彫りで水波文をあらわし、緑釉をかけた磚で、厚さは約1.5cm(口絵)。全形は不明。隅は直角をなすもの以外に70°前後、110°前後のものを含む。火を受けた痕跡が著しい。瓦溜SK7560から合計24点出土した。出土状況から創建中金堂に使用されていたものであろう。過去に東金堂から出土した緑釉水波文磚(『興福寺東金堂修理工事報告書』1940、『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』1978)に比べ、厚さが半分ほどの薄い作りである。(千田剛道)

第2表 金箔瓦出土地一覧

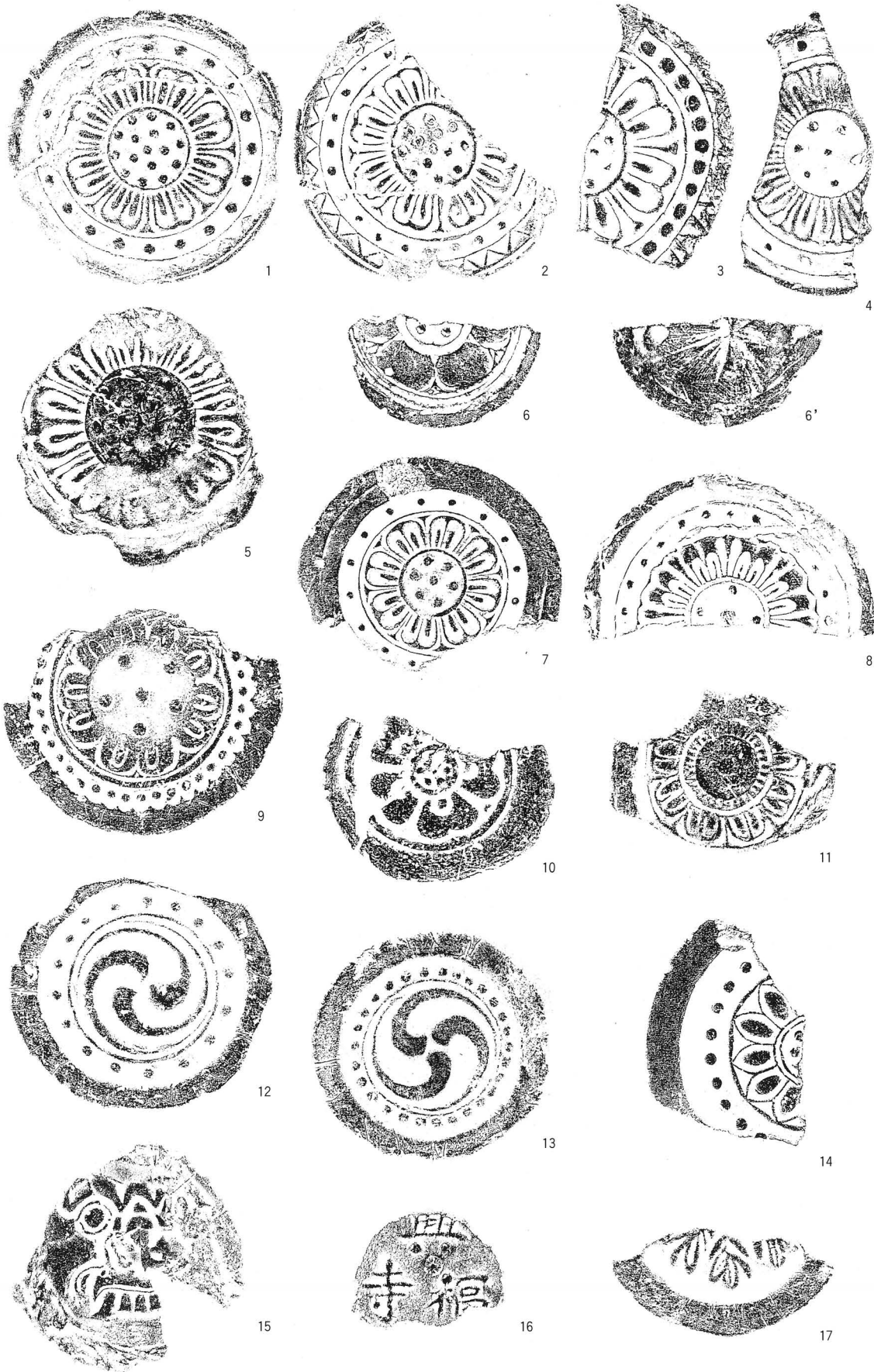
	遺跡名(年代)	所在地	種別	備考
1	南小泉遺跡(慶長?)	宮城県仙台市	巴(本隅瓦?)	墓。若林城下町。
2	元袋遺跡	宮城県仙台市	巴	伊達家御飯屋跡か。
3	養種園遺跡	宮城県仙台市	菊花文	伊達家別荘小泉屋敷か。若林城下。
4	仙台城跡(慶長6~)	宮城県仙台市	桔梗、菊丸	漆付着鬼(桐、菊)、鯨、軒瓦あり。伊達氏。
5	福島城跡	新潟県上越市	軒丸?	詳細不明。
6	若松城跡(文禄元~)	福島県会津若松市	鬼(五七桐)	採集品。桐、菊文軒平。蒲生氏郷。
7	沼田城跡(天正18~)	群馬県沼田市	鬼?	真田信幸。
8	旧薩摩藩江戸屋敷	東京都港区	五七桐	
9	佐伯藩上屋敷跡	東京都千代田区	鬼?	毛利高政。
10	金沢藩下屋敷跡(元和?~)	東京都文京区	梅鉢、唐草、鯨ほか	五七桐軒丸あり。
11	甲府城跡(天正18~)	山梨県甲府市	鬼(五三桐)、鯨ほか	(豊臣秀勝)。
12	上田城跡(天正18?~)	長野県上田市	鬼、鯨、鳥襲(巴)	五七桐文鬼瓦。真田昌幸。
13	松本城跡(天正18~)	長野県松本市	飾り	五七桐軒丸。石川数正。
14	小諸城跡(天正18~)	長野県小諸市	五三桐、唐草	仙石秀久。
15	岐阜城跡(天正?~)	岐阜県岐阜市	巴、鯨	織田信忠。
16	金沢城下	石川県金沢市		中村博司氏ご教示。
17	駿府城跡	静岡県静岡市	巴	中村一氏。徳川家康。
18	名古屋城跡	愛知県名古屋	巴	徳川義直。清洲城移築。
19	名古屋城御霊屋跡(延享2~)	愛知県名古屋	鬼(丸に三葉葵)	
20	清須城跡(天正(14、)18~)	愛知県清洲町	巴、唐草、飾り	(織田信雄)、豊臣秀次。
21	松ヶ島城跡(天正8~13)	三重県松阪市		織田信雄。
22	松阪城跡(天正13~)	三重県松阪市	軒平?	蒲生氏郷、松ヶ島城より移築か。
23	神戸城跡(天正8~)	三重県鈴鹿市	飾り?	織田信孝。
24	安土城跡(天正4~10)	滋賀県安土町	巴、唐草、鬼、鯨ほか	織田信長。
25	八幡山城跡(天正13~文禄4)	滋賀県近江八幡市	飾り(桐)	豊臣秀次。
26	彦根城跡(慶長14?~)	滋賀県彦根市	巴、鬼、鯨	井伊直勝、大津城より移築か。
27	金ヶ森遺跡	滋賀県守山市	菊花文、飾り	
28	観音堂遺跡	滋賀県草津市	鬼	
29	古屋敷遺跡	滋賀県大津市	菊花文	
30	大津城跡(天正14~)	滋賀県大津市	五七桐、鬼、飾り	豊臣秀吉。
31	聚楽第跡と周辺屋敷跡(天正13~文禄4)	京都府京都市	巴、梅花文、鬼ほか	豊臣秀吉。
32	伏見城跡と周辺屋敷跡(文禄2~慶長)	京都府京都市	巴、花文(桐)、鯨ほか	桐文は橋本関雪記念館蔵。豊臣秀吉。
33	豊国神社跡	京都府京都市	五七桐	妙法院蔵品は関連品か(中村氏ご教示)。
34	上賀茂神社	京都府京都市		中村氏ご教示。
35	北野天満宮	京都府京都市	梅鉢文	
36	離宮八幡宮	京都府大山崎町	巴、唐草、鳥襲、面戸	
37	興隆寺跡	京都府向日市	巴	
38	興福寺	奈良県奈良市	五七桐	
39	大坂城跡と周辺屋敷跡(天正11~慶長20)	大阪府大阪市	五七・五三桐、巴ほか	
40	堺環濠都市跡(慶長?)	大阪府堺市	巴	千利休屋敷隣接。
41	岡山城跡(天正18~)	岡山県岡山市	五七桐、巴、鬼ほか	桐文は伝世品。宇喜多秀家。
42	厳島神社千疊閣(天正15)	広島県宮島町	「王」文	豊臣秀吉寄進。
43	広島城跡(天正17?~)	広島県広島市	飾り(桐?)	毛利輝元。
44	江美城	鳥取県江府町	鯨	
45	小倉城跡(天正15~)	福岡県北九州市	鬼	桐文軒平瓦あり。毛利勝信。
46	永照寺跡	福岡県北九州市	鬼	中村氏ご教示。
47	名護屋城跡(天正18~慶長3)	佐賀県鎮西町	鬼、飾り(五七桐)ほか	豊臣秀吉。
48	日野江城跡	長崎県北有馬町	鳥襲(巴)	有馬晴信。
49	熊本城跡(天正16~)	熊本県熊本市	桔梗唐草	拓本のみ。加藤清正。
50	豊国神社跡	熊本県熊本市	巴	表採。加藤清正。
51	佐土原城跡(天正)	宮崎県佐土原町		島津氏。

- \* 桐文は花の数を示す。
- \* 種別欄のゴシック体は軒丸瓦、明朝体は軒平瓦、丸ゴシック体はその他の瓦を示す。
- \* 備考欄に記した瓦は文様に関する注釈で、金箔付きの瓦ではない。

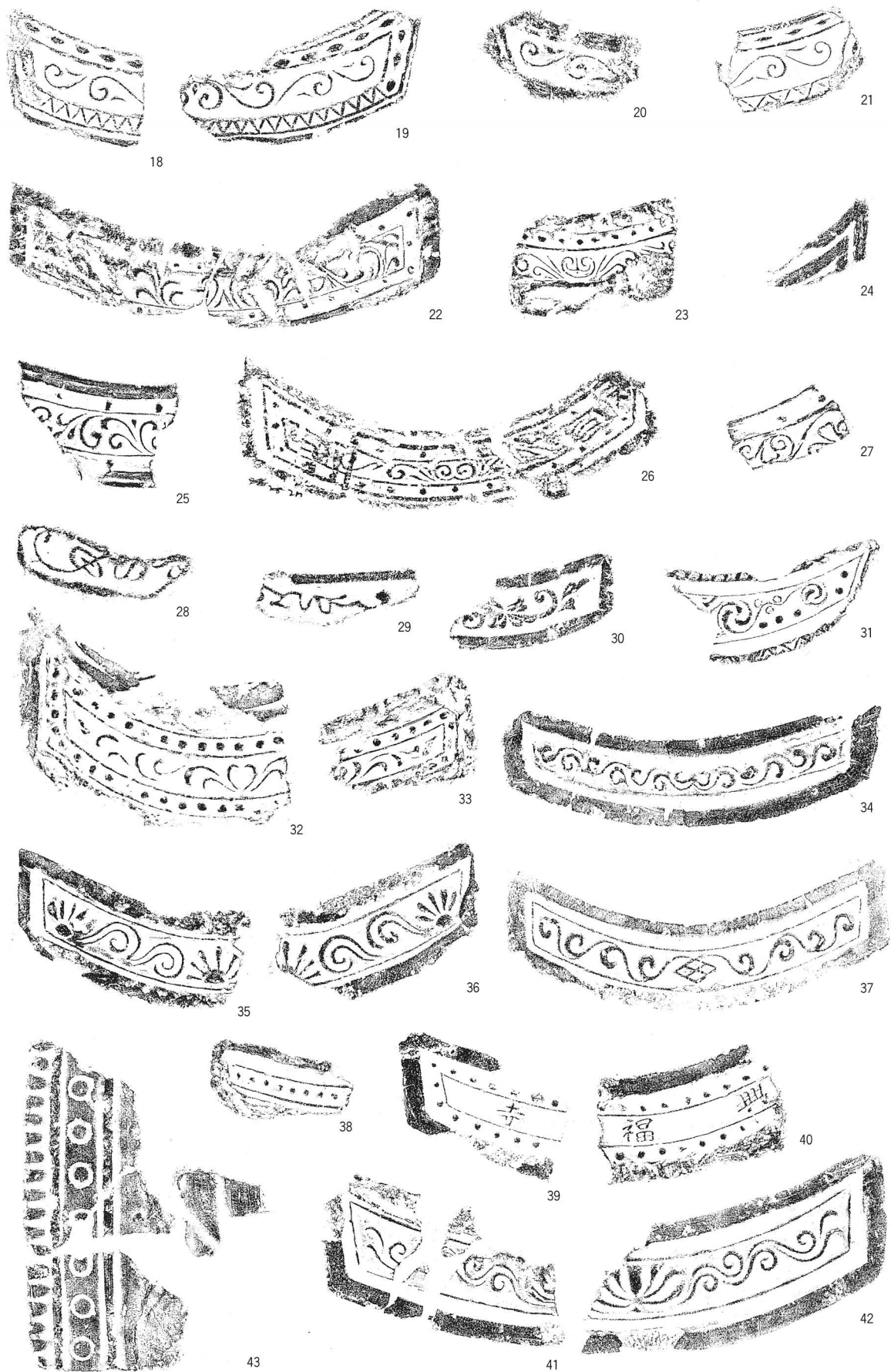
参考文献

- 中村博司1978「金箔瓦試論」『大阪城天守閣紀要』6 大阪城天守閣 pp.16-26  
 中村博司1980「金箔瓦試論-補遺」『大阪城天守閣紀要』8 大阪城天守閣 pp.14-22  
 中村博司1995「金箔瓦論考」『織豊城郭』第2号織豊城郭研究会 pp.99-130  
 倉澤正幸1994「信濃における織豊期の城郭所用瓦の考察-上田城跡他出土軒瓦・金箔瓦の検討-」  
 『信濃』第46巻第9号 pp.29-45  
 田代 孝1992『開館10周年記念特別展 天下人の時代』山梨県立考古博物館

上表は以上の文献、その他の報告書等をもとに清野孝之が作成した。  
 このほか、以下の方々からご教示、また資料の提供を得ました。記して謝意を表します(敬称略・順不同)。  
 中村博司(大阪城天守閣)・青山 均(大津市教育委員会)・橋本眞次(橋本関雪記念館)・  
 古閑正浩(大山崎町教育委員会)・宮本佐知子(大阪市文化財協会)・山川 均(大和郡山市教育委員会)・  
 中井 均(米原町教育委員会)・森島康雄(京都府埋蔵文化財調査研究センター)



第18图 出土軒丸瓦 (1 : 4)



第19图 出土軒平瓦·鬼瓦 (1 : 4)

## (2) 金属製品・銭貨

**金属製品** 銅製品には、風鐸、飾金具、垂木先金具、歩瑤、鋏などがある。

風鐸は、中金堂前面にある石敷きSX7550上層の遺物包含層から破碎した状態で出土した。小片も含めて18点になる。全体の形状は不明であるが、乳の間とそれを区画する突線のありかたから、鐸身の一部と推定される(第20図)。厚さ4.0mm~5.5mm。鐸身は、幅3mm、高さ2mmの突線による1条の縦線と2条の横線により袈裟襷を構成する。区画された乳の間には縦3段以上の乳が配置される。乳は径8.5mm、高さ8mmの円筒形。裾部は、花卉状に大きく外反して広がるものと思われ、花卉の1単位は幅25cm前後になる。裾端部は「く」の字に外方に屈折し、厚さ4mmほどの縁をつくる。

興福寺所用の風鐸としては、1955年の食堂発掘調査の際に、食堂西北隅の包含層中より笠形部分の破片が出土している(『興福寺食堂発掘調査報告』1959)。東金堂では、1937年の修理工事の時点で4隅の風鐸の半数の遺存が報告されているが(『興福寺東金堂修理工事報告書』1940)、本例は大きさ・形態からこの風鐸とちかいものであったと推定される。また、出土位置からみて中金堂東南隅に懸けられていた可能性がある。

この他の銅製品として、厚さ2.2~3.0mmの平板な飾金具片がある(第21図)。蕨手状唐草文の主葉と子葉が相互に接する箇所断片である。茎の幅9~11mm。表面には文様を縁取る線彫がおこなわれ、透彫の側縁は、表面から裏面に開きぎみに落とす。遺物包含層出土。

このような金具の類例に、奈良県大官大寺出土飾金具、大安寺出土飾金具がある。大官大寺例は、1974年の第1次調査で金堂(当初、講堂に比定されていた)基壇の東北隅および東南隅から出土した。出土位置と点数から隅木端の飾金具と考えられている。縦約42cm、横約33cm。厚さ2mmの銅板の片面に文様を線彫し、その空間を透かしたものである(『奈文研年報』1975、岩本正二・西口寿生「飛鳥・

藤原地域の出土遺物」『考古学雑誌』63-1 1977)。本例を重ね合わせると、唐草の茎の幅はほぼ一致し、同様の構成を取り巻きの強さ、向き共通する箇所が4ヶ所ある(第22図)。本例の方が銅板が厚いこと、唐草の巻きがわずかに緩く、子葉部分も大きいため、文様構成自体がわずかに大きくなること、大官大寺例が巻きの先端を明瞭につくるのに対し、本例は玉縁状に丸くつくることなどの相違がある。

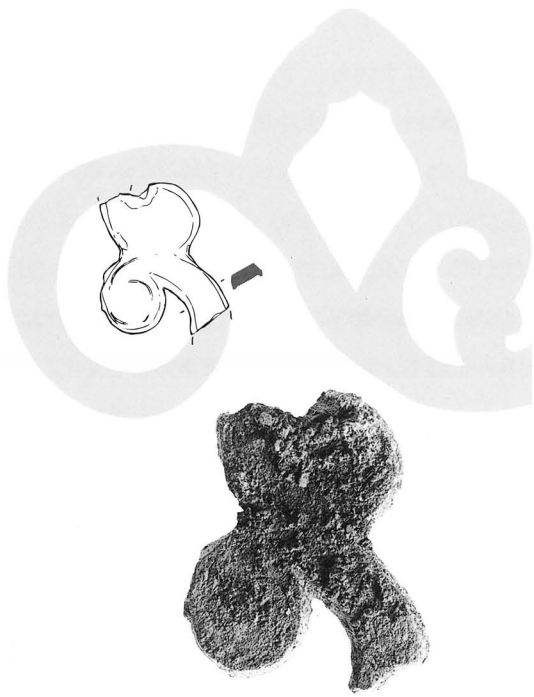
一方の大安寺例は、1966年の調査で金堂・講堂間に広がる焼土層から出土したもので、大官大寺例との類似が指摘されている(松村恵司「大安寺の金属製品」『大安寺史・史料』1984)。厚さが3mmであることは本例に近いが、線彫のないことなどの相違がある。

垂木先金具は、いずれも小片であるが、円形金具の縁部分の破片が出土している。

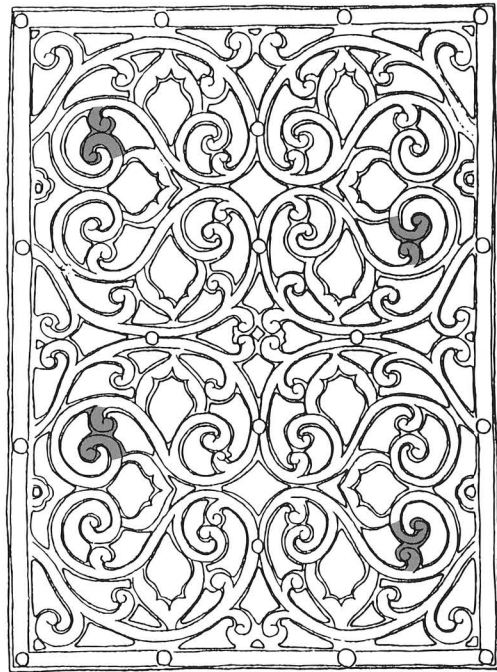
鉄製品として、断片も含めると100点を超す



第20図 風鐸片(1:5、背景は東金堂風鐸)



第21図 銅製飾金具（実測図1：2、写真1：1）



第22図 大官大寺隅木端金具復原図（1：5）

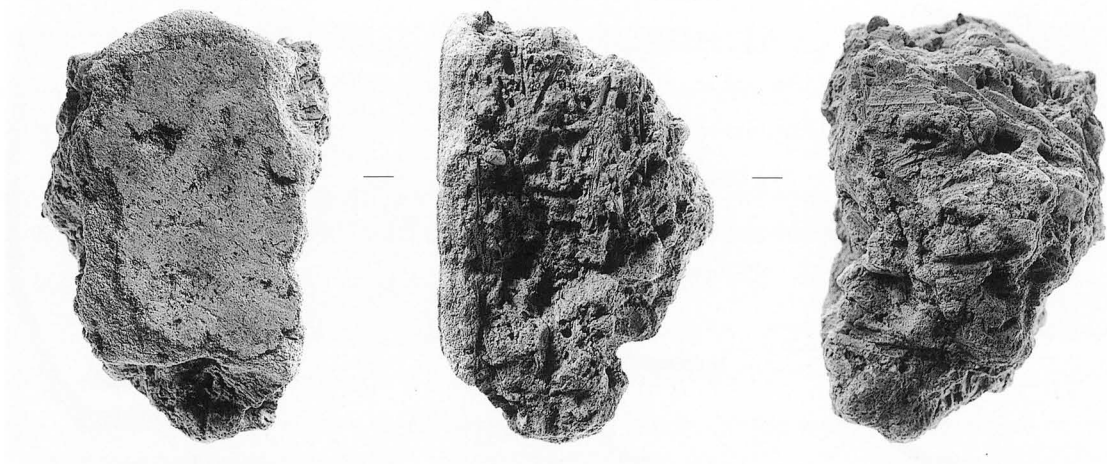
多量の釘のほか、鋸、火打金などが出土した。

**銭貨** 表土からの出土が多く、寛永通宝20枚以上を含む近世以降のもの29枚が出土した。

**その他** 木製品の出土は、ごくわずかであるが、調査区西端の瓦溜SK7560からは部材片が出土した。2片に割れているものの、本来は同一のものと推定され、1辺が約9cmの角材となる。長さ23.5cm。樹種はスギ。石製品には砥石があり、SK7560などから出土している。

また、中金堂院の罹災を示す遺物として、火熱を受けて硬化した壁土片が11点出土している。第23図は、長さ8.5cm、幅5.5cm、厚さ5.2cmの小塊で、1面が平坦になっており、本来の壁面の様子をうかがうことができる。平坦面は、厚さ5mmの均質な乳白色の土層により形成され、上塗と考えられる。以下の層は小礫を含むなど土自体が粗俵で、混和された苧材の痕跡が多数認められる。下塗あるいは中塗に相当しよう。被熱のため全体に橙褐色を呈し、黒色化した部分もある。北面回廊の北側柱筋上にある土坑SK7526から出土した。

（次山 淳）



第23図 火熱を受けた壁土片（約2：3）

### (3) 土器

本調査では、整理箱で約20箱ぶんの土器が出土した。うちわけは土師器、須恵器、二彩・緑釉陶器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、および陶磁器であり、年代は奈良時代～近代にわたる。ここでは遺構から出土した土器のうち、特徴的なものを示すこととする。特記したもの以外はすべて土師器である。

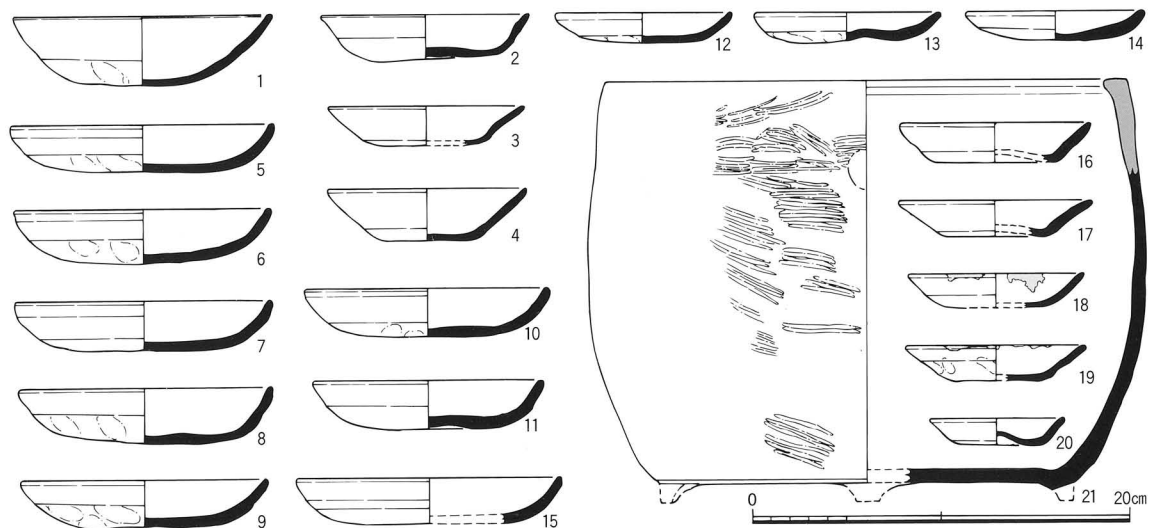
2は、北面回廊南側柱の隅を含め東から4個目の礎石据付穴より出土した皿。この位置の礎石は2度にわたって据え替えがあり、現状では2基の据付穴が重複しているが、双方とも埋土に焼土を含む。土器はそのうち新しい据付穴の東南隅部で、口縁部を上にして納置されたような状況で出土したが、内部に埋納物の痕跡は認められない。赤褐色を呈する薄手の土器で、口縁部を強くヨコナデする。14世紀の年代が与えられ、嘉暦焼失後の再建にともなうものと考えられる。3・4は東面回廊東側柱の隅を含め北から5個目の礎石据替掘形から出土した皿。灰白色を呈し、口縁部外面を底部付近まで幅広くヨコナデする。14世紀の土器で、これも嘉暦焼失後の再建にともなうものである。

1・20は東面回廊基壇上の土器埋納坑SX7520から出土したものの。1は灰白色を呈する皿で、口縁部外面を幅広くヨコナデする。20は小型のへそ皿。ともにいわゆる白土器で、14世紀の年代が与えられる。嘉暦焼失後の再建時に基壇上に埋納したものであろう。

5～14は北面回廊基壇上の斜行溝SD7525出土。5～11は皿で、橙褐色を呈する。口縁部外面のナデは2段にわたって強く施し、口縁部下端が凹線状になるものもある。12～14は小皿で、褐色を呈し、口縁部外面を幅狭くヨコナデする。13・14はやや厚手で、口縁端部は丸くおさまるが、12は薄手で口縁部は強く外反する。これらは12世紀代のもので、治承焼失後の再建時に比定できる。

21は、東面回廊西雨落溝SD7503の凝灰岩製側石の抜取溝から出土した瓦質土器の風炉。同一個体の破片から図上復原したため、器高は推定である。胴部上半に穿孔をもち、外面全体に粗い磨きを施す。底部には低い足が付いていた痕跡があり、三足になると推定できる。内面上半には煤が付着する。還元が不足で、褐色を呈する。年代は14世紀後半以降であり、嘉暦焼失後の再建にともなうものであろう。

15～19は中金堂前庭部にある仮設建物の柱穴出土。15はSB7531・7532出土の皿。口縁部を2段にヨコナデし、12～13世紀頃のものであろう。16～19はSB7534出土の小皿。19は白土器、16～18は赤土器で、14～15世紀のもの。18・19は灯火器として使用する。その他、図示しなかったがSB7530から12世紀頃の皿小片、SB7533からは14世紀以降の瓦質土器の底部が出土した。(玉田芳英)



第24図 出土土器 (1:4)